香川大学は私の原点

髙木　康弘（教育　昭和 57 年卒）

令和２年３月末、長きにわたる教職員生活を終えました。

いつの頃からか教員を志すようになった私にとって、香川大学は憧れの大学でした。しかし、高校の成績が芳しくなく、合格は難しいと言われ続けながら、高校３年の３学期、毎日丸亀市の図書館に通い詰め、粘りに粘って受験勉強を重ねました。３月末の合格発表で自分の名前を見つけた時は、天にも昇る心持ちで、それまでの苦しさが全部吹き飛んだことが、今も懐かしく思い出されます。

憧れのキャンパスに足を踏み入れた私は、美術研究室で４年間を過ごしました。しかし軽い気持ちで美研に入った私は、同期生がみんな、高校の美術部だったり、地元の展覧会に絵を出品していたりしたことを知り、呆然としました。木炭デッサンもしたことがなく、油絵の具を見るのも初めてだった素人の私は、この先やっていけるか、不安でいっぱいでした。初の大学祭で美研全員が作品を出品することを知り、目の前が真っ暗になりましたが、面倒見の良い先輩たちと、優しい同期生たちに助けられながらなんとか油絵を一枚仕上げることができ、ほっとしたものでした。その後、下手くそなりにデザイン、木工、素描、絵画などの実技を懸命にこなしながらも楽しく過ごしていましたが、彫塑に出合って、その面白さに夢中になりました。恩師は池田清史先生です。先生には本当にお世話になりました。

粘土をこねて適度な柔らかさにして保管したり、先輩の作品の石膏取りやポリエステル樹脂の作品成形を手伝ったりして、深夜になることも度々でしたが、充実した日々でした。

サークルは、高校の先輩の誘いで陸上部に入部していました。元来の運動音痴だった私なので、成績は芳しくなかったのですが、暑い日も寒い日もグランドに出て、走り続けました。そのおかげで、身体は頑強で、６３歳の今まで大病をすることなく元気に過ごすことができました。美術研究室では、先輩後輩の別なく、タメロでなあなあでやっていたのですが、サークルでは、先輩後輩のけじめを、厳しくたたき込まれました。出会ったときの挨拶はもちろん、先輩には敬語を遣い、特に４年生の存在は神様で、話をするのも緊張の連続でした。けど、練習では厳しい先輩も、大会の打ち上げや忘年会では、よく面倒を見てくださったものでした。

陸上部の打ち上げでは、先輩後輩の別なく、みんなで肩を組んで一つの輪になり、逍遥歌を謡って閉めていました。主将の「流星落つる処～　オリーブの実の　熟るる里～・・・」のかけ声に「オ～ッ！」と、みんなで吠えながら？合唱した逍遥歌は忘れられません。

♫　旅とこそ聞け　人の世は　　この旅を　我　雄々しくも
　　一人　来たりて　麗しの　　瀬戸を　渡りし　旅人ぞ

こうした一つ一つの経験が、私という人間をつくりあげてくれました。香川大学で過ごした日々は今思い出しても宝石のように輝いています。